

氏 名	やまもと すみこ 山 本 純 子
学位(専攻分野)	博 士 (学 術)
学 位 記 番 号	博 甲 第 5 3 7 号
学位授与の日付	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 3 条第 3 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科 機能科学専攻
学 位 論 文 題 目	大坂の浮世絵における絵師の制作と版元の意図
審 査 委 員	(主査)教授 並木誠士 教授 日向 進 教授 伊藤 徹 准教授 三木順子 准教授 平芳幸浩

論文内容の要旨

本論文は、江戸時代後半から明治時代初期にかけて、大坂で制作された多色摺の浮世絵版画(上方浮世絵)の展開について、浮世絵師とその作品についての実証的な分析と版元・コレクターについての社会的な分析を踏まえて、新たな見解を提示した論文である。

本論は大きく分けて 3 部からなる。

第 1 部では、大坂の浮世絵について、文献や先行研究を整理する。そのうえで、本論で扱う問題の所在を明らかにしている。

第 2 部では、北洲、貞広、広貞、芳瀧といった四人の絵師の役者絵をとおして、大坂の浮世絵が持つ特性を考察している。具体的には以下の 2 点である。

ひとつは、春好斎北洲によって確立された表現が、規範性をもって周辺あるいは後続の絵師たちに浸透している点である。とくに、天保期後半には、江戸の歌川派に学んだ絵師たちにも北洲の画風が受け継がれたことが指摘されている。

2 つ目は、中判の使用である。天保の改革以後、大坂では中判という小型の判型が主流となることにより、絵師の作風に変化が生じている点が指摘されている。本論では、広貞・芳瀧らの作品が中判という判型の特徴を踏まえて的確に分析される。

第 3 部では、大坂における浮世絵の制作を、天満屋喜兵衛に代表される版元の出版やビゲローのような収集家による収集方法や明治期の展覧会における肉筆画評価といった、絵師や作品の周辺の情報をとおして考察している。そのうえで、第 3 部をとおしてとらえた特性を、第 2 部にて求めた絵師の表現による特性へ重ね合わせることにより、江戸歌川派様式による制作や地模様を用いた意匠の企画、役者絵以外のジャンルへの拡大、判型の変化、浮世絵収集の目的などが、絵師の制作と関連づけて考察されている。第 3 部の考察は、第 2 部で作品に即して分析した様式的特性の補強となっている。

上記の作業を経たうえで、最後に大坂の浮世絵の歴史を、以下の 3 期に分類している。

第 1 期(寛政 3 年(1791)ー文化 9 年(1812))は、大坂の浮世絵制作の創始期である。具体的には北洲の表現が確立する以前である。

第 2 期(文化 10 年(1813)ー天保 13 年(1842))は、北洲の表現が確立する期である。そして、

文政4年以後は、北洲の役者絵様式は、次第に大坂の絵師のあいだへ広まっていく。

第3期（弘化4年（1847）～明治20年（1888））は、大坂の浮世絵に新たな特性がもたらされる展開期である。この時期については、とくに広貞や芳瀧による中判の判型による制作が特徴的なものとして位置づけられている。

以上のように本論文は、これまでまとまった研究がほとんどなかった上方浮世絵について、絵師・作品についての様式的な分析と版元や収集活動に対する社会学的な考察とにより、あらたな展開を示している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、江戸時代後半から明治時代初期にかけて、大坂で制作された多色摺の浮世絵版画（上方浮世絵）の展開について、新たな見解を提示した論文である。

江戸で制作された浮世絵が、明治時代以降広範に収集され、また、研究されてきたのに対して、大坂で制作された浮世絵に関しては、まとまったコレクションも少なく、本論に先行する研究もほとんどないのが現状である。

申請者は、数少ない上方浮世絵コレクションのひとつである上方浮世絵館の学芸員として日常的に作品に接する立場にあり、また、ボストン美術館をはじめとする他機関、個人所蔵の上方浮世絵についても精力的に調査を進めたうえで、実証的な観点から本論を執筆している。とくに、体系的な先行研究としては唯一と言ってよい松平進の論考が国文学および歌舞伎研究からのアプローチであったのに対して、作品を詳細に分析する美術史的な方法論から独自の上方浮世絵論を展開している点は、本論が第一に評価されるべき点である。

本論が独自の価値を有する第二点は、作品そのもの、あるいは浮世絵師を対象とするだけでなく、版元や明治期の上方浮世絵コレクターまでを視野に入れて論を構成している点である。上記の実証的な作品分析に加えて、社会的な存在として上方浮世絵を捉えることにより、本論は重層的な構築体となっている。

美術史的な側面からの上方浮世絵論は緒についたばかりであり、その点で、本論は今後の上方浮世絵研究にとって参照されるべき位置をすでに確立しているとも言え、また、申請者の今後の研究活動の基礎ともなるものである。

以上のように、本論文は上方浮世絵研究におけるあらたな側面を切り開いたということが言え、十分に評価に値するものである。

なお、本論文の一部は、申請者による査読をとまなう以下の学術論文として、すでに公表されている。

「上方浮世絵の版元と絵師 天満屋喜兵衛を手がかりに」『デザイン理論』（意匠学会編）47号、2005年、pp.65-78

「芳瀧の肉筆画 幕末期から明治期への展開」『美学』（美学会編）229号、2007年、pp.57-70